30 回ジョイント編

30 回のジョイントは、29 回ジョイントが清心グリーと混声合唱。地元のお仲間だったためテーマとしては、男の戦いの場は用意されていなかった。特に演奏会の打ち上げなど、まったくと言っていいほど、戦うことは許されていなかった。特に１年生だった３１期にはジョイントの楽しさは全く理解されなかったと思う。そのため、続く 30 回のジョイントは男声４団の名城、愛知、東大、しかも地元岡山を離れ、アウェー名古屋での勝負の場が与えられた。

私が１年ながら感じた、アウェー広島で感じた、敗北感を消し去る場が与えられたのであった。そのために、私ら３０回役員が決めた団結のテーマは、”ジョイントで勝つ！”　これはロータスは文科系運動サークルと自ら称し、ジョイントとは男の勝負であって、自曲のうまさはもちろん、合同演奏曲も、そしてなにより打ち上げで勝たなければ意味が無いと、練習で毎回こんこんと力説し、団結力を高めていったのである。これだけ聞いただけで、若い１、２年は男声合唱団とのジョイントコンサートは未経験なので、奮い立ってくれていたようだ。
ジョイントコンサートでは、自曲はハイソ漂うドイツ語、メンデルスゾーンで勝負。勝つために、演奏直前まで、異例のパート練習を行わせた。演奏後、合同指揮者（奈良県合唱連盟理事長：山本寿太郎先生）に、ダメと思っていたロータスが一番良かったと講評を受け、勝った。

問題の打ち上げは、会場まで移動が長く、着いた先は何と相撲部屋が練習するお寺の広い座敷。そこで、すでに、男の勝負の場とボルテージを挙げてきた若い突撃連中は、団結を高めるために用意したパートグッズを持ち出し、吠えまくって、他団の構成員たちに果敢に勝負を挑んでいったのである。そこらじゅうで、歌い、当時流行っていた、糸のスプレー缶やらで、パーティと言うより地獄絵図。そこに、驚いたのはお寺の和尚。
”何だこのざまは！、会議に使うと聞いて貸してたのに。どういうことだ！”と一喝。

ホストのマネージャーは、青白く、皆が正座をさせられ怒られ、誤った。なんと合同指揮者の先生、ピア伴の先生までも皆正坐して謝ったのだ。そして、どこからか、”さ、掃除しよう”となり、打ち上げ途中で掃除となった。

演奏は勝利感が残ったものの、打ち上げは、果たして勝ったのか、どうも降雨サスペンデッドでノーゲームだったかもしれない。